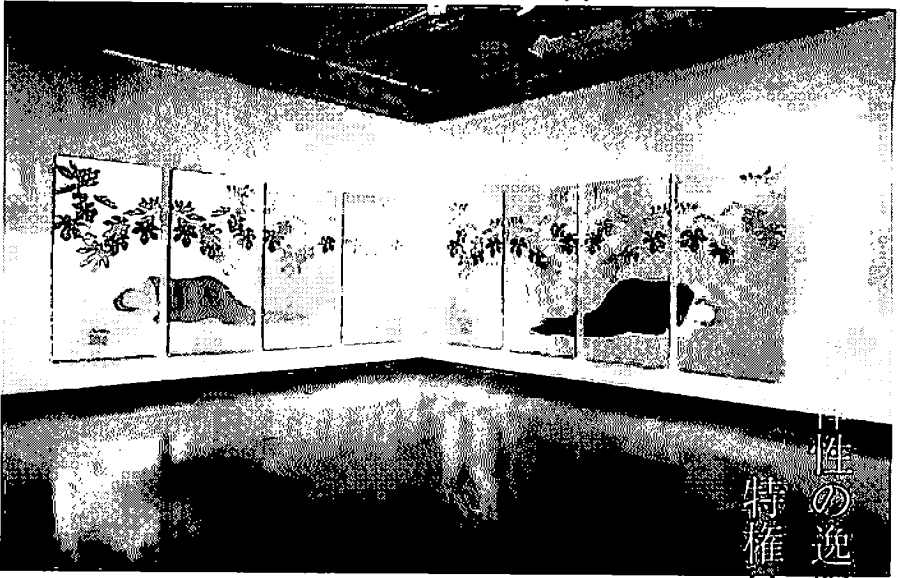


Title	身体性の逸脱と特権性の喪失
Author(s)	おの, さやか
Citation	臨床哲学のメチエ. 2004, 13, p. 20-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71168
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University



個性の逸脱と 特権性の喪失

おのさやか

今回のギャラリートークは、ある明確な眼差しの違いを作者であるわたしに突きつけた。このギャラリートークでは、目の前にある画面から受ける印象のみで、絵画を言語化していくという制限が鑑賞者に対して共通に与えられる。つまり、作品の前にして得た鑑賞者の「ことば」を聴こうというのだ。

このギャラリートークでは、鑑賞者の身体を裏切るような巧妙なふたつの仕掛けがはたらいていた。ひとつは、作者は居ながらにして作品について語らないことである。なぜならばギャラリートークと云えば、多くの鑑賞者は作者の「ことば」を聴く態度で臨むものだからだ。もうひとつは、それぞれの鑑賞者が「絵画を観る」ことで得た「ことば」を持ち寄ることである。鑑賞者に「絵画を観る」という非言語的、あるいは前言語的な経験をあえて「ことば」にしてもらうのだ。「絵画を観る」行為はやはり「観る」のであって、「ことば」として語る行為に直結するものではないだろう。つまり、ここには鑑賞者の「聴く」「観る」という暗黙の身構えに対する裏切りが出現するのだ。

この裏切りが、鑑賞者のもつ鑑賞者という役割を逸脱させる。逸脱は「絵画を観る」行為における身体性を露呈し、（描く身体）と（描かない身体）の差異を出現させる。ある絵画作品をどのように観るかは、作者も含め様々である。しかし、「描く」行為を経験している身体は、絵画に対する記憶や習慣が、そうではない身体と比べて違いがあるのは事実だ。例えば、マチエールの層やタッチの筆跡を知らず知らずのうちに、わたしの身体が追体験していることはよくある。つまり、わたしたち

作者がそうした(描く身体)を備えた眼差して絵画を覗てしまうことにあらためて気づかされるのである。と同時に、(描かない身体)をもった鑑賞者は、目の前にある絵画の色やかたちをきつかけにそれぞれの記憶や習慣を手がかりに覗ようとすることに気づく。この身体性の違いが、同じ作品を前にしながら絵画への眼差しを大きく異にしている。描いているからこそ見えないものと見えるものがある。描いていないからこそ見えないものと見えるものがある。同じ絵画を覗るといふ地平のうえで互いの「ことば」を隣合わせることで、自らの身体性への気づきとなるのだ。

鑑賞者の「ことば」から得られたのは、それぞれが自らの記憶や習慣を手がかりに絵画を覗ているということであった。それは、作者も鑑賞者も絵画への解釈が個々人で異なるということである。だからこそ鑑賞することにおいて、作者の意図が必ずしも作品の見方だとは云えないのだ。「絵画を覗る」という振る舞いをするうえで、作者も鑑賞者も同じ地平に並ぶことになる。つまり、たとえ(描く身体)と(描かない身体)の異なりがあつたとしても、展示を終えた作品の前では「作者である」という特権性は色褪せてゆくのである。また同時に、「鑑賞者である」という特権性をも削いでゆくことになるのだ。しかし実際には、鑑賞者の特権性は失われたかのように見えて、決して削ぐことのできないものとして存在しつづける。なぜなら、鑑賞者は絵画に向きあう限り、「絵画を覗る」行為から逃れることができないからである。だが、作者は「絵画を描く」ことから「絵画を覗る」ことへと移行すること、作者であるという特権性を失ってゆく。つまり、作者の特権性とは、制作の最中にしか存在し得ないのである。こうして鑑賞者と作者の身体性を比較することで、かえって作者の特権性がより際立って見えるのである。作者、絵画、鑑賞者という三者の往復的關係を見据え、既存の役割から逸脱すること、絵画とひとの關係はあらたな飛躍への可能性を孕んでいる。つまり、作者は自らの作品の前で特権性を喪失したときにはじめて、あらたな特権性を獲得することができるのではないだろうかと思えるのである。

おのさやか

京都造形芸術大学大学院博士後期課程

